

# 脳が生みだす言語としての日本手話

東京大学 大学院総合文化研究科 酒井 邦嘉

## 講演の内容

言語に規則があるのは、人間が言語を規則的に作ったためではなく、言語が自然法則に従っているからである。こうしたチョムスキーの言語生得説は激しい賛否を巻き起こしてきたが、最新の脳科学は、この主張を裏付けようとしている。実験の積み重ねとMRI技術の向上によって、脳機能の分析は飛躍的な進歩を遂げた。言語学や脳科学を通して言語に対する理解が深まることで、言語をめぐる多くの誤解が解けるようになってきた。たとえば、日本手話が人間の自然言語であることは、次のような証拠から明らかである。

1. 手話には音声言語と同様に語順があり、文法構造を持つ。
2. 手話は、乳幼児が母語として獲得できる。
3. 左脳の損傷で、音声言語と同様に手話失語が起こる。
4. 手話にともなう脳活動は、基本的に音声言語と同様である。

講演では、脳が生みだす言語としての日本手話を明らかにしながら、言語という究極の難問について脳科学の視点からわかりやすく紹介する。

「手話がろう者に必要な言語であるということは、地球が太陽のまわりを回っているのと同じくらい確かなことです。言語権の保障を訴える本書は、ろう教育の転回となるでしょう。」 - 『ろう教育と言語権』全国ろう児をもつ親の会編（明石書店）帯文

## 参考図書

『言語の脳科学—脳はどのようにことばを生みだすか』（中公新書、2002）

『心にいどむ認知脳科学—記憶と意識の統一論』（岩波書店、1997）

東京大学 酒井研究室 ホームページ：<http://mind.c.u-tokyo.ac.jp/index-j.html>